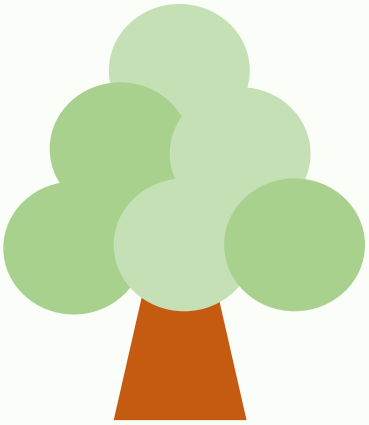

こかげのにちじょう④

～退所児童のアドボケイター～

鳴海　明敏

５月某日

今年の３月から４月、年度替わりの時期に、高校卒業した子どもたちや高校中退後在園していた子どもたち６名が、あいついで退所した。そのうちの４名は、青森市内のグループホーム等で生活しながら、就労支援作業所で働くことになった。

学園の開設以来１３年間の退所児童は約１００人だが、そのうち現在も青森市内で生活しているのは人が１５名くらい居るので、併せて２０名くらいが市内で生活していることになる。もちろん自宅で親と暮らしている人もいるし、結婚してパートナーと生活している人もいるが、手帳を所持していて障害者のサービスを利用しながら生活している人もいる。

学園に入所すると、全員が学園の非常勤医師が勤務する病院の外来を受診し、カルテを作り、在園中はその医師の診療を受け、その病院の薬局から薬を処方してもらっているので、退所後も市内で生活している場合は、その病院へ通院して、調子を崩すと入院ということになる。

先日、そのような退所児童の一人から電話があった。グループホームで生活しながら就労継続支援 B 型の作業所に通っていたのだが、調子を崩して、現在は入院中だという。彼女が言うには、グループホームの世話人さんからのパワハラやセクハラに耐え切れず調子を崩してしまったが、信頼している相談支援事業所の支援員さんに相談して、今回の入院となったとのこと。入院して、これからのことを前向きに考えられるようになり、今後は一人暮らしをする予定とのことだった。

これまでの学園のスタンスは、退所児童から連絡があれば、対応するが、こちらから積極的に生活状況を確認するということはしてこなかったが、だんだん市内で生活している人

が増えてきたことから、もう少し彼らと積極的に関わることを考えた方がいいのではないかと思い始めている。

その際に、学園が単独で退所児童の支援という観点でかかわることも勿論ありだけど、なんか物足りないなあと思って、思いついたのが以下の構想である。

学園の退所児童が市内で、充実した生活を送っていけるように、関係機関のネットワークを構築して、連携しながら支援をしていくことが出来ればいいなあと思った。関係機関としては、病院（主治医、PSW、心理士）、相談支援事業所、就労支援事業所、グループホーム、学園などになるのかなあ。

今回電話してきてくれた人は、相談支援員さんとちゃんと話せたようだけど、そんな人ばかりではないので、ネットワークでの学園の役割としては、「退所児童のアドボケイター」という役割がいいような気がする。

（了）